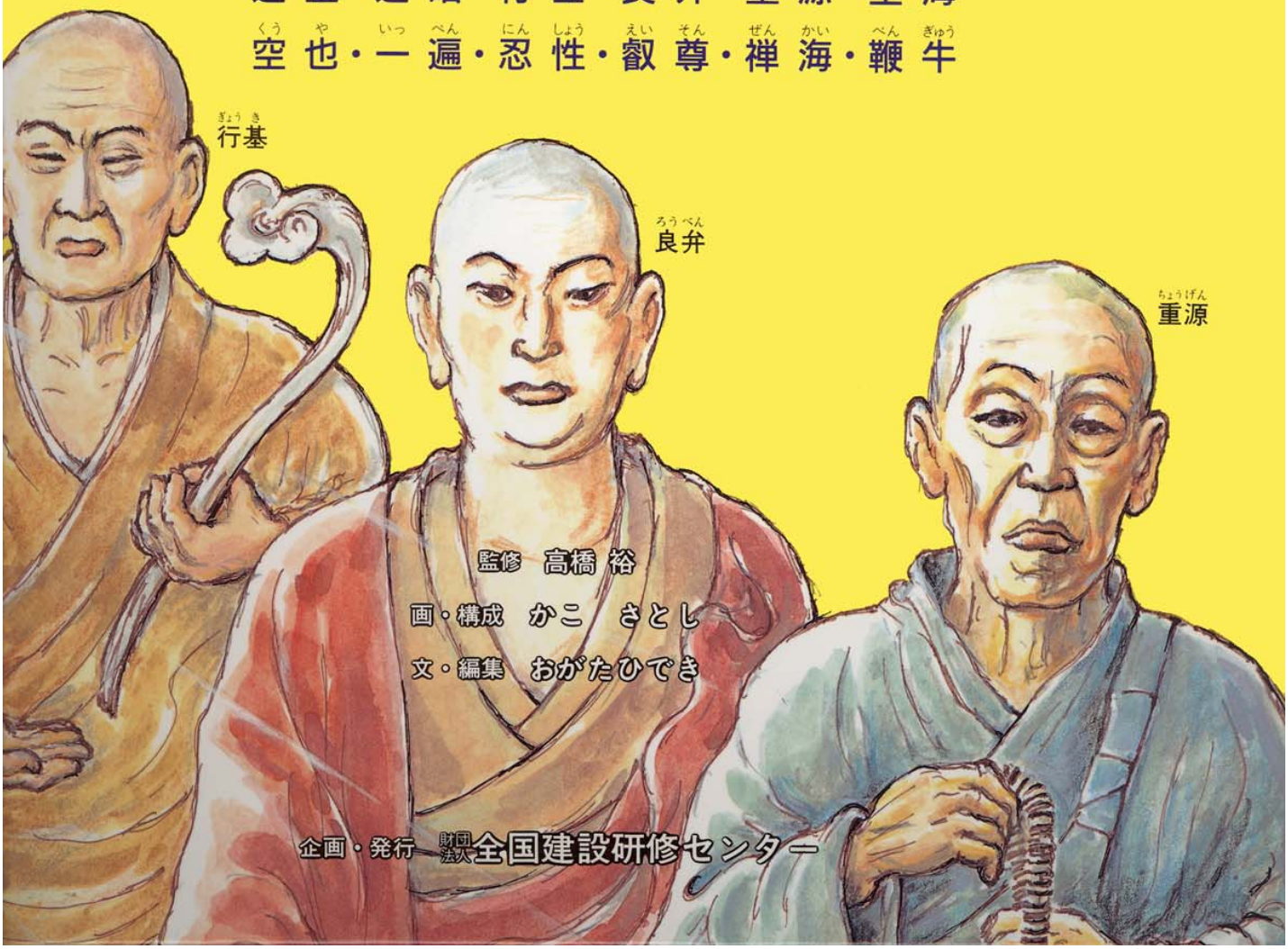
土木の絵本

人をたすけ国をつくったお坊さんたち

日本の土木工事をひらいた人びと

道登・道昭・行基・良弁・重源・空海
空也・一遍・忍性・叡尊・禅海・鞭牛



監修　高橋 裕

画・構成　かこ　さとし

文・編集　おがたひでき

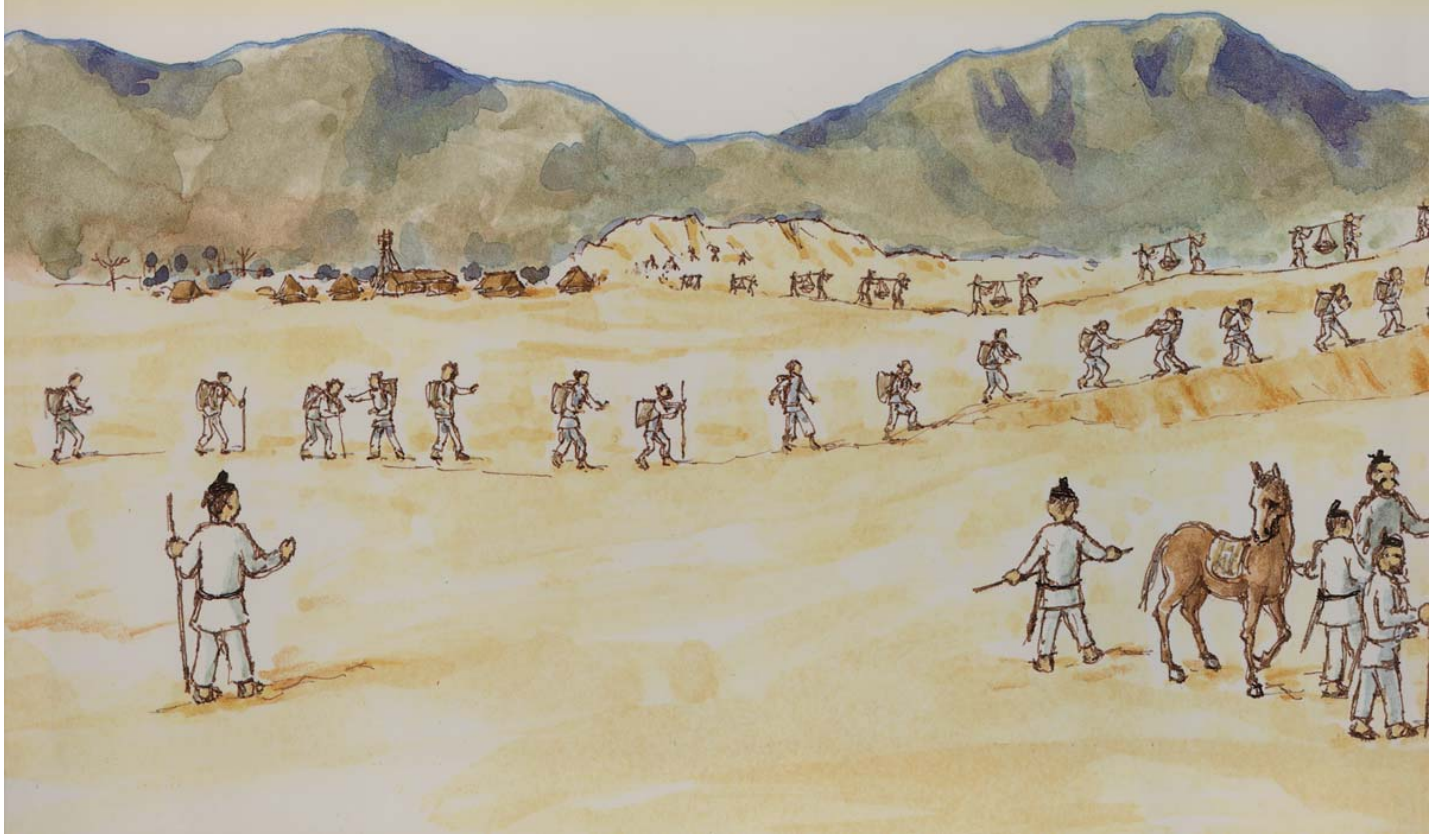
企画・発行　財団法人全国建設研修センター

人をたすけ国をつくったお坊さんたち

土木の仕事とは、人が住んでいるまわりや生活しているところを、住みやすく、暮らしやすいようにつくったり、まもったり、なおしたりする工事のことです。

その土木の仕事を、お坊さんがどうしてやるようになったのでしょうか。

なぜ、お坊さんがやったのでしょうか。



日本の土木工事をひらいた人々

日本の古代、まだあちこちで豪族たちがたがいに競いあい、小さな国をつくっていました。そのころ、大きな土木工事といえば、その国の王や大事な人が死ぬと、ひつぎの上に大きな土の山をきずいて葬ることでした。この古墳*といわれる山をつくるため、大勢の人々が土を運び、働きました。

古墳のある所
（黄色の所は
特に重要な区域）

*古墳　土を高くもった古代の墓。
高塚ともいう。

日本古代の土木工事

やがて日本が一つの国にまとまるようになると、天皇のいる宮殿の建設や、そのまわりの都*のまちづくり、軍隊などの通る道*をつくるのが、大事な土木の仕事となりました。

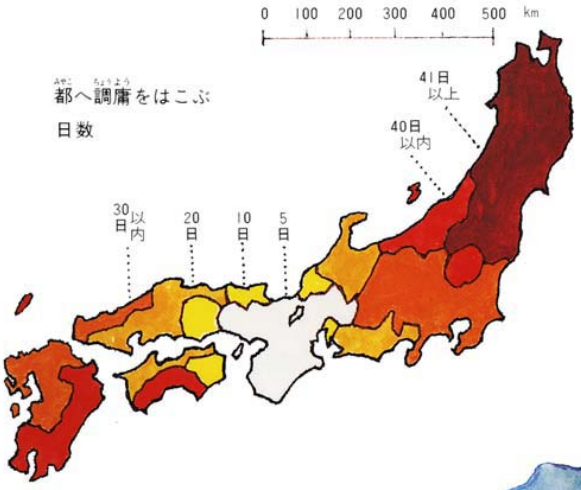
こうした工事には、たくさんの農民が集められ働きましたが、そうした人たちの生活に役立つ工事はほとんどされませんでした。

538年、中国から朝鮮半島をへて日本に仏教が伝わり、聖徳太子の支持であちこちに建つようになった寺は、争いをしずめ国を守る大事な役目を受け持つようになりました。

*宮のある所の大きなまち
*駅制のある街道で、役人、防人の通路、租庸調の運搬に用いられた。

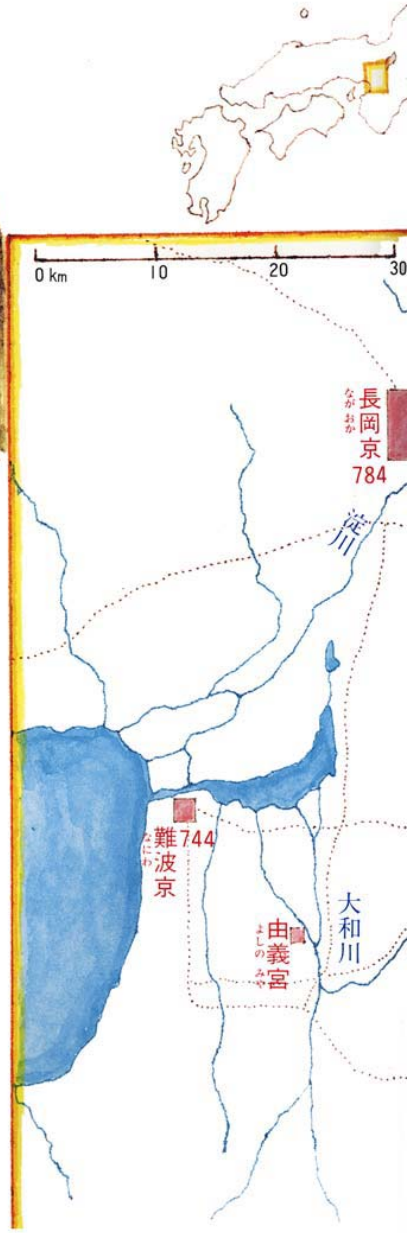
645年に大化改新という大きな改革がおこなわれ、国に権力があつまるようになり、宮殿や寺院はますますりっぱになりました。

ところが、逆に民衆は税*の負担などで生活はきびしくなっていきました。



*税　律令制とよばれる当時の国の仕組みで一般の人は租（米）庸（労役または布）調（布または産物）を国に納めた。役人は無税。

寺のなかから出て民衆のなかへ



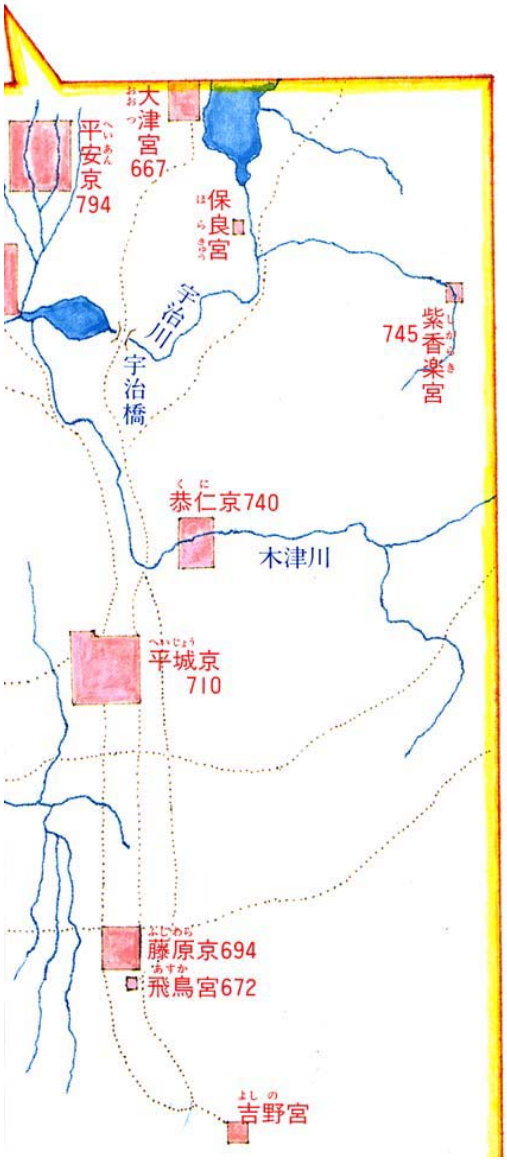
こうしたなか都の寺では、国がいつまでも安らかで災いがおこらぬように、お経をよみ、祈るお坊さんには特別な手当が与えられていました。

けれどももともと仏教は、悪いことをせず良い行いをして心を清めていくというシャカ*の教えがもとになっているものです。

したがって寺にこもっているだけではなく、寺の外で生活や病気で困っている人を助けようとする僧があらわれてきました。

＊**シャカ**　仏教をひらいたインド・シャカ国の王子。
BC560～480に80歳で死去したと伝えられる。

当時、奈良 飛鳥から日本海の方へ行くには、宇治川の急流をわたらなければなりませんでした。それまで小さな仮の橋があったといわれていますが、人や馬が流されたりしてとても困っていた場所です。



大化2年(646)、奈良元興寺の僧 道登は、人々に仏の道を説き、人々の困難をのぞくためにその力を集めて、この宇治川にはじめてしっかりとした橋をかけました。*

*宇治橋碑文、日本霊異記による。

道登年表

600	高麗の学生山尻恵満(家系)の子として生まれた
645(大化元)	10師に選ばれた名僧
646(2)	宇治橋をかける 入唐し修行、元興寺の僧となる
660(斉明 6)	死去

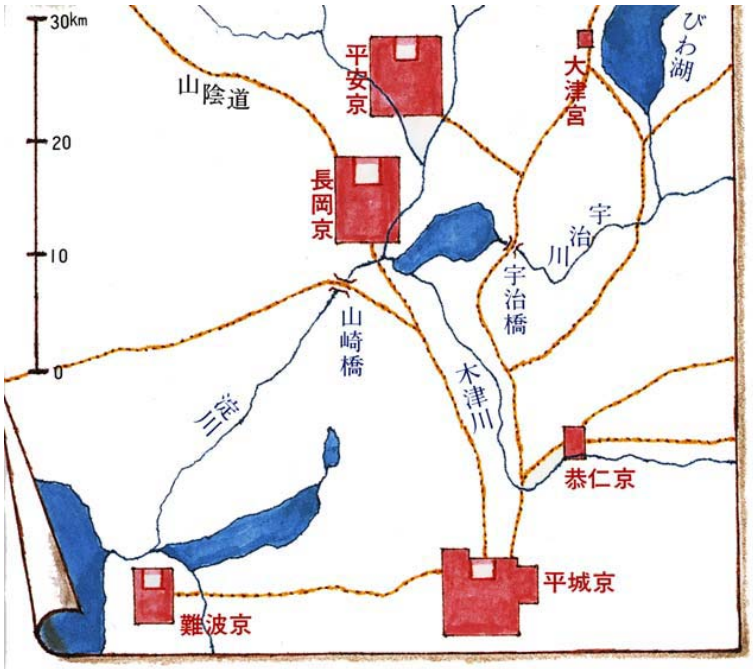
道昭と橋づくり

道昭は、土木や造船の技術をもっていたお坊さんでしたが、唐で学んだ新しい知識をもとに、天武8年ころ、宇治橋をもっと大きくてじょうぶなものにかけかえた*と伝えられています。

*続日本紀による。
国が関係してかけ直したか。

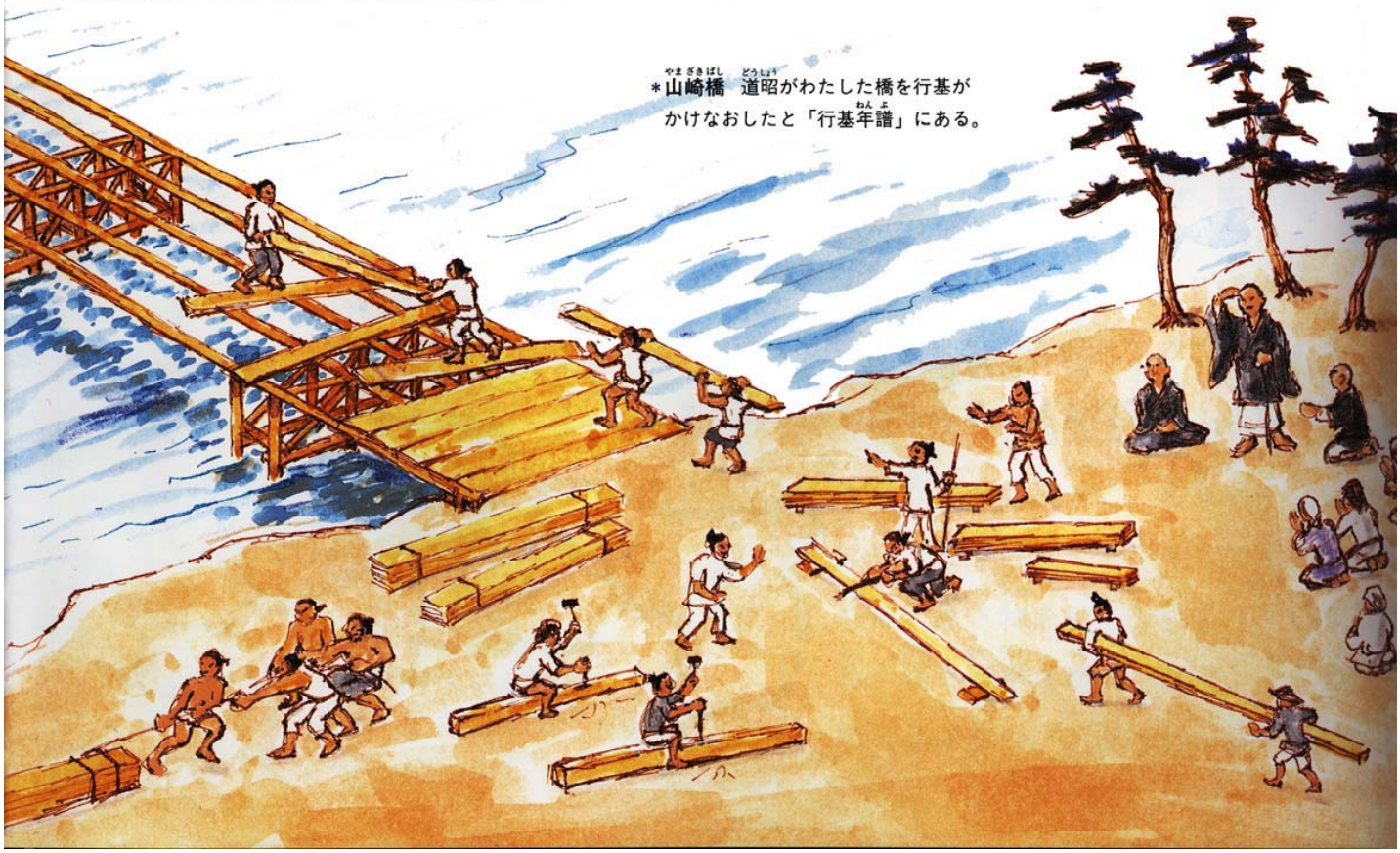
道昭年表

629	渡来人系の船連(水運造船技術をもつ)の家系に河内で生まれる（道照とも書く）
	出家して元興寺入門
653(白雉 4)	遣唐使に従い三蔵玄奘に学ぶ
661(斉明 7)	帰国
	諸国をまわり、井、津、橋をつくり教化
698(文武 2)	禅院を建てる　大僧都となる
700(文武 4)	72歳死去
	火葬のはじまりと記録される



さらに奈良から山陽道に入る途中の淀川に山崎橋*をつくりました。またあちこちに井戸をほり、船つき場をつくって人々のなやみをのぞき、くらしをたすけて諸国をまわりました。

こうした人助けと土木のやり方は、弟子として一緒についてまわった行基に受けつがれていくことになります。



*山崎橋　道昭がわたした橋を行基がかけなおしたと「行基年譜」にある。

行基と昆陽池

道昭が死ぬと弟子の行基は僧の位を捨て、自分の家で人々に仏の教えをとき、教えに応じた人々の力だけで、国から資金や人などの援助もうけずに、今の大阪、京都、滋賀一帯に橋や道、池をつぎつぎとつくっていきました。

僧を取りしまる役所は「民をまどわすこまりもの」として活動をやめさせようとしました。しかし、行基のまわりに人々はどんどんふえていきました。

昆陽池（伊丹市西部）
1806（文化３）の頃の図

天平3年（731）、それまでたびたび洪水が出て、まわりの人々が困っていた兵庫のくぼ地*に、行基は新しい溝と大きなため池をつくりました。

＊阪神大震災の活断層の一部にあたる。

行基の熱意と、「菩薩さま*」としたって集まってきた人々の力によって、大雨による洪水を防ぎ、かんがい用水をためる多目的ダムとなったこの昆陽池は、1200年後のいまも、上水用の貯水池*として用いられています。

行基年表

668(天智 7)	河内高志才智の子として出生
682(天武 11)	奈良飛鳥寺で出家
700(文武 4)	道昭死す
704(慶雲 元)	生家を家原寺とする
712(和銅 5)	救済事業をすすめる
717(養老 元)	僧尼令違反として禁圧
731(天平 3)	行基の弟子出家が許される 昆陽施院、狭山池院をたてる この頃、狭山池を修造か？
743(15)	大仏造営勧進
745(17)	大僧正となる
749(天平勝宝元)	82歳で死去

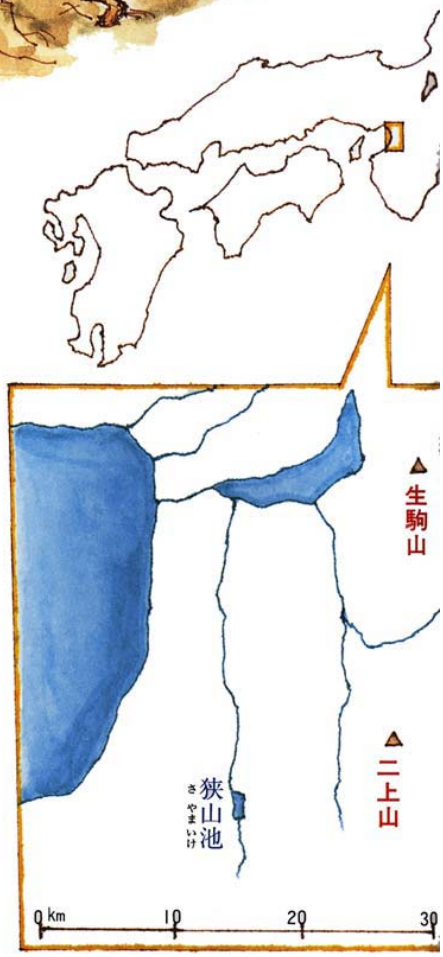
＊**菩薩** 真の悟りを求めながら人々を助け、修行にはげむ聖者。

＊現在は当時の1/3の貯水量。15万立方m。

狭山池など全国約百ヶ所の工事

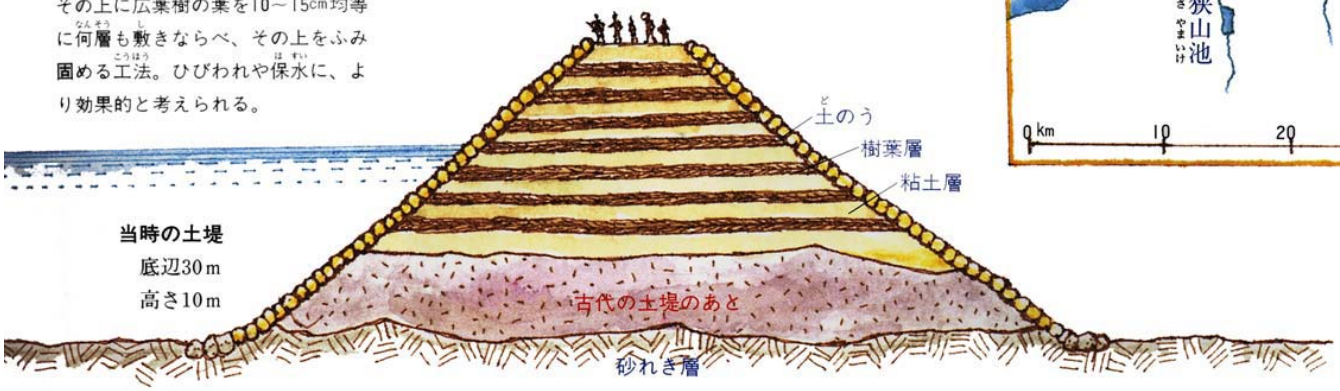
昆陽池をなおした翌年、さらに河内の国（今の大阪）に古くからある狭山池が洪水をおこさぬように、行基が改修したと伝えられています。

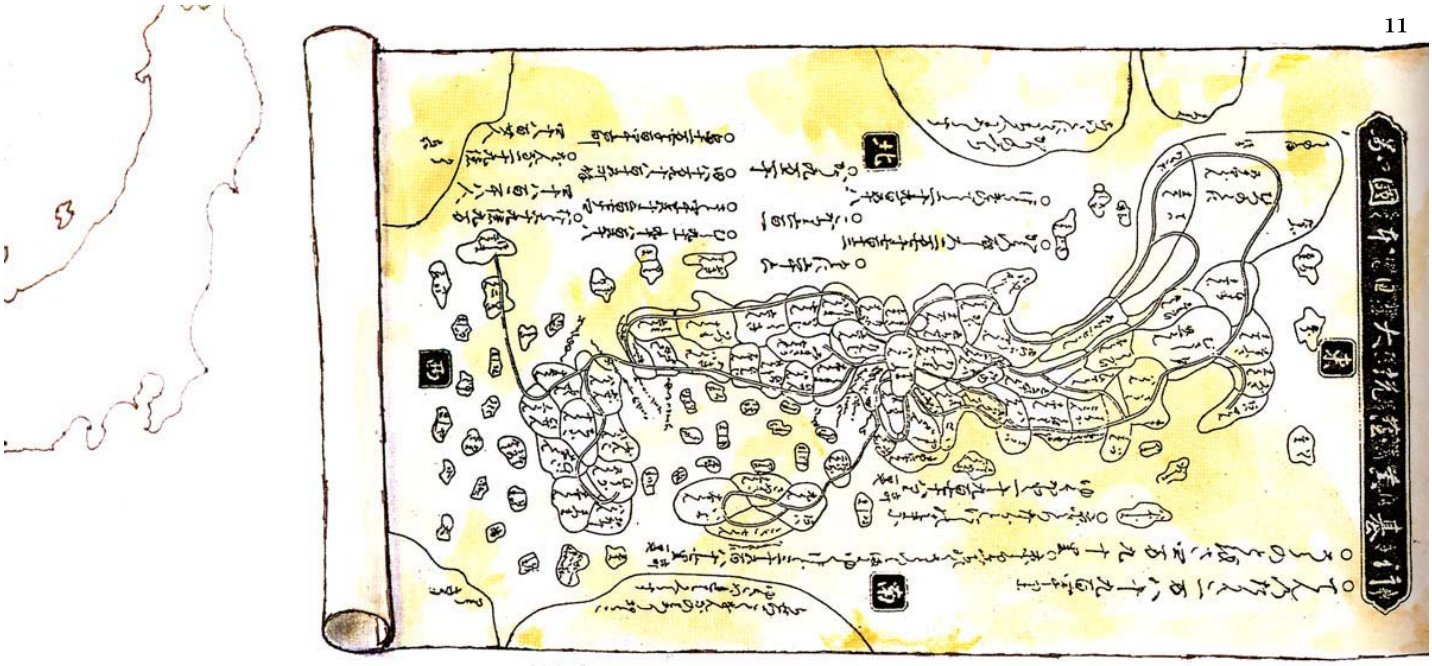
堤の高い土手は、敷葉工法*という当時の最新のつくり方が用いられたようです。



*敷葉工法　堤に土をつむとき、まず土のうをならべその間に土をもり、その上に広葉樹の葉を10～15cm均等に何層も敷きならべ、その上をふみ固める工法。ひびわれや保水に、より効果的と考えられる。

行基の時代、狭山池土堤改修工事





行基図　行基がつくったといわれる最初の日本地図。徳川時代の初めまで用いられた。

こうして行基は、およそ30年の間に橋6、道1、池15、溝6、船つき場2、樋3、堀4、宿泊所9、寺院49をつくり、その他多くの道や橋をなおしたりしました。

また、瀬戸内海の船つき場や港*を整えるなど、その活動は全国におよび、最初の日本全図をつくったといわれています。

＊瀬戸内航路のうち室（播磨）から川尻（摂津）の間、三港を一日の碇泊地とした五泊制を定めた。

行基の行動と成果を無視できなくなった国は、行基が63歳の時、法師*という僧の位をおくり、ようやくその功績を認めました。

＊学徳すぐれた僧の第二位の称号。

東大寺大仏殿の建立

そのころ仏教をあつく信じた聖武天皇は、大仏をつくろうと思いたち、工事がなかなか進まないので、行基にその大役をたのみ、大僧正*という位をおくりました。

大工事には、材料や労力を整え、費用を準備することが必要です。76歳の行基は、大仏をたてる労力奉仕をつのって寄付を集め、全国をまわりました。

仏教ではこうしたことを勧進*といいます。行基の勧進に応じ、材木の寄付5万人、金銭の寄付37万人、労力奉仕者のべ166万人があつまりました。

*大僧正　僧の最高位。745年行基がはじめて任ぜられた。

*昭和の大修理と称された1980年の勧進では寄付23万人。

一方、聖武天皇の願いをうけた奈良金鐘寺の僧 良弁は、寺のつづきの台地を大仏を建てる所に選び、びわ湖を通して近江地方の材木を運ぶよう手配して工事をささえました。実際の大仏と建物をつくる仕事は、造東大寺司という役所が、のべ5万人の作業者をやとって工事にあたりました。

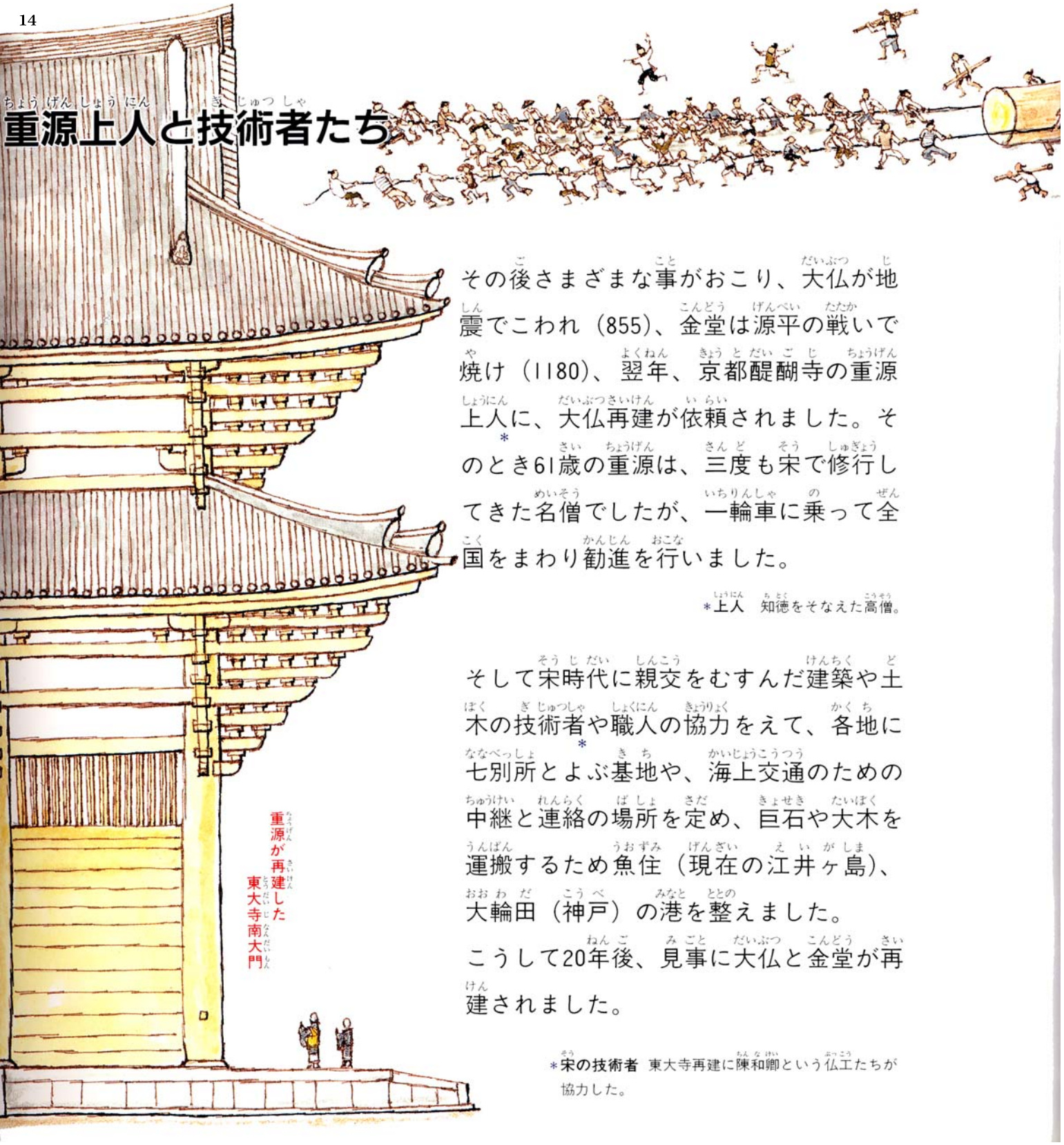
行基の勧進、行基集団の参加、良弁や造東大寺司の努力によって、工事にとりかかって8年後の天平勝宝4年（752）大仏開眼式*が行われ、14年後にほぼ工事が完成しました。行基は完成を見ることなく749年82歳で死去しましたが、良弁は東大寺の初代の別当（責任者）となって大仏と東大寺をまもり、後の世へ引きつぐこととなりました。

*大仏開眼式　仏像を堂に安置するときに行い、仏師が筆をとって像に眼を入れ、仏としてあつかう式。

良弁年表

689（持 統 3）	近江青銅技術の家に生まれたという。のち義淵に師事
733（天 平 5）	金鐘寺で修行
752（天平勝宝4）	東大寺別当
756（　　8）	大僧都となる
761（天平宝字5）	石山寺の建立
773（宝 亀 4）	僧正となり85歳で死去

重源上人と技術者たち



重源が再建した東大寺南大門

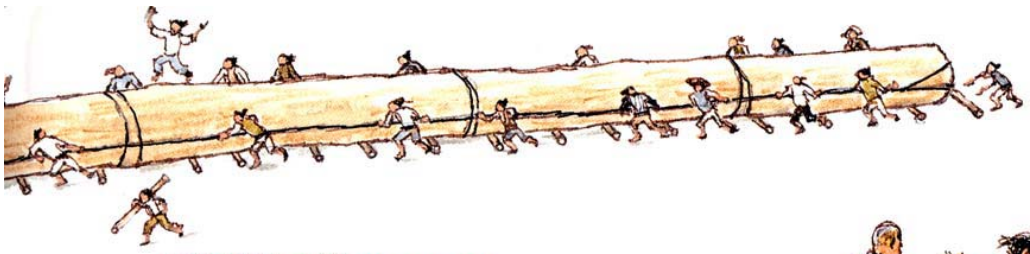
その後さまざまな事がおこり、大仏が地震でこわれ（855）、金堂は源平の戦いで焼け（1180）、翌年、京都醍醐寺の重源上人に、大仏再建が依頼されました。そのとき*61歳の重源は、三度も宋で修行してきた名僧でしたが、一輪車に乗って全国をまわり勧進を行いました。

*上人　知徳をそなえた高僧。

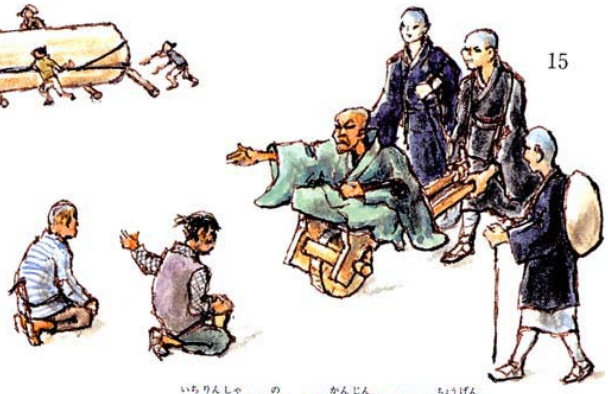
そして宋時代に親交をむすんだ建築や土木の技術者や職人の協力をえて、各地に七別所*とよぶ基地や、海上交通のための中継と連絡の場所を定め、巨石や大木を運搬するため魚住（現在の江井ヶ島）、大輪田（神戸）の港を整えました。

こうして20年後、見事に大仏と金堂が再建されました。

*宋の技術者　東大寺再建に陳和卿という仏工たちが協力した。



東大寺再建の巨木をはこぶようす



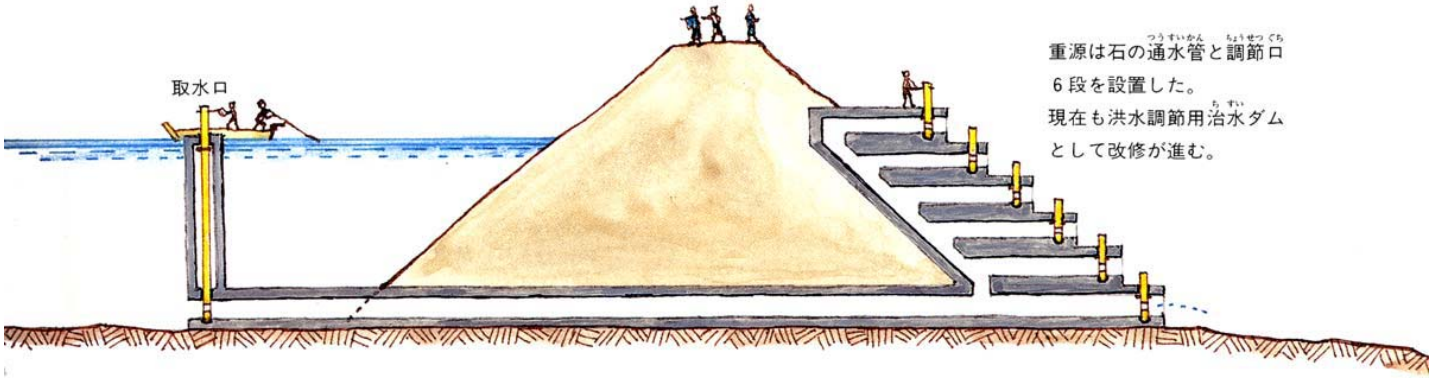
一輪車に乗って勧進をする重源

また82歳の重源は、奈良時代に行基が改修したといわれる狭山池が、長い年月で水もりするようになったのを、建仁2年（1202）2ヶ月余りで石づみの吐出口などを備えたしっかりした堤につくり直しました。

重源年表

1121(保安 2)	紀季重の子。京都で出生
1133(長承 2)	醍醐寺で出家。高野山で修行 源空に師事
1139(5)	大峯山で修行
1167(仁安 2)	宋(中国)に赴く
1181(養和元)	東大寺再建の勧進
1185(文治元)	頼朝から再建の依頼
1195(建久 6)	大和尚となる
1196(7)	魚住、大輪田の両泊を修築
1202(建仁 2)	狭山池の修復工事
1203(3)	東大寺再建総供養 「南無阿弥陀仏作善集」作成
1206(建永元)	86歳で死去

重源が改修した狭山池



重源は石の通水管と調節口6段を設置した。
現在も洪水調節用治水ダムとして改修が進む。

利他行の考えと新しい仏教

大日如来像

これまでのべてきた道登から重源につづくお坊さんたちは、寺のそとで人々の苦しみやなやみを除こうとした人たちです。仏教ではほかの人を助ける行いを「利他行」*といいますが、土木や建設の工事という大きな「利他行」によって人々を救い、自分は仏のような誠実で公平な心で生きたいと努力したお坊さんたちでした。こうしたすばらしい人のつながりを、もう一つきりひらいた空海というお坊さんがいました。

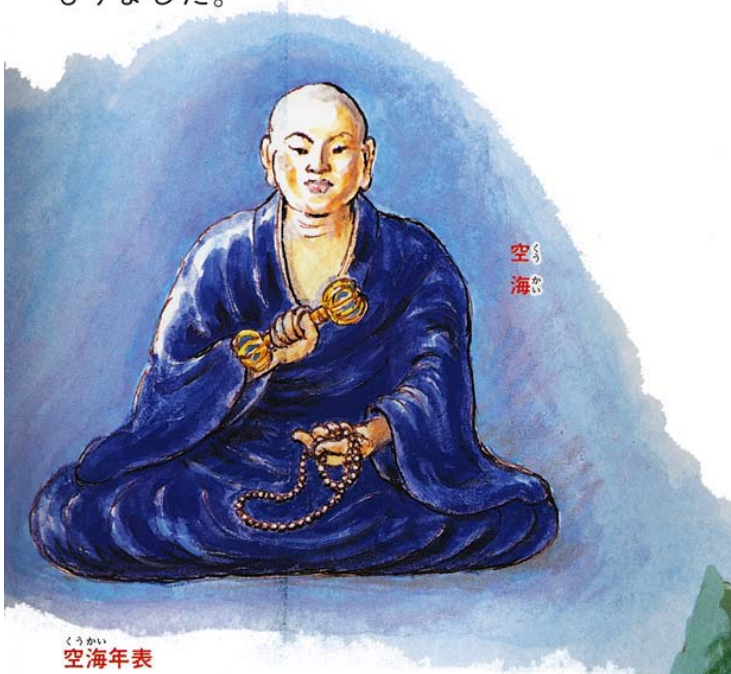
*利他行　自分のことよりほかの人を助けることを先にする行いのこと。

留学僧として唐にわたり新しい仏教を修めた空海は、唐から帰るとき、工学や医術などすすんだ知識が書かれた「五明*の書」を写してきました。

そのころ日本では、寺や僧の数がふえ、その田畑や土地は無税なので、しだいに国の財産は乏しくなり、人々の生活は苦しくなってきました。

*五明　当時の実用全集。内明（仏教哲学）医方明（医術）声明（文法学・説話学）因明（論理学・修辞学）工巧明（工作、暦学、数学）をいう。

こうしたなか帰国した空海は、貴族や公家の支持をえて華やかに栄えている仏教のやり方をあらためようと、高野山にこもりました。



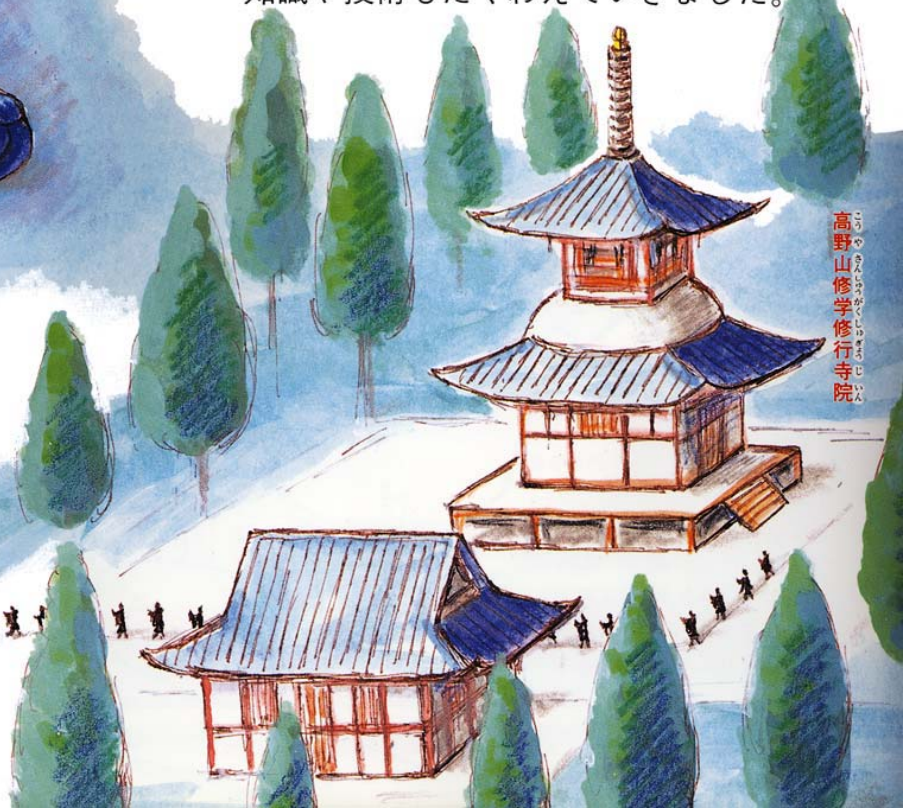
空海

空海年表

774(宝亀 5)	讃岐国に生まれる
804(延暦23)	遣唐使について唐に渡る
806(大同元)	帰国
809(　　4)	京の高雄山寺に入る
816(弘仁 7)	嵯峨天皇から高野山をたまわる
821(　　12)	満濃池を修理
827(天長 4)	大僧都に任ぜられる
828(　　5)	大輪田造船所別当となる
835(承和 2)	高野山にて死去。62歳
921(延喜21)	弘法大師の称号をおくられる

修行の間ひそかに全国各地をめぐり、一部のえらい人のためではなく、下づみで苦労している人々の立場で考え、その生活に役立つような新しい仏の教えを人々に説きひろめていきました。

空海の名声がしだいに人々の間に伝わっていく間、空海は行基を助けた技術者の教えをうけるなど、実際に役立つ土木の知識や技術もたくわえていきました。



高野山修学修行寺院

讃岐の水がめ満濃池

満濃池は香川県にある大きなため池です。雨が少なく、急な山地のこのあたりでは、農作の大切な貯水池でしたが、818年ころその堤防がこわれ大きな被害をうけました。

＊大宝年間（701～4）讃岐の国守道守朝臣がつくったと伝える。

四国香川県の丸亀市の南に満濃池がある

空海が改修したころの満濃池
（北西部から南東を見た図）

空海改修構造の特徴

①弓状のアーチ形をした堤
（水の圧力に強く、こわれにくい）

②しがらみをつくった
水ぎわに木の杭、枝葉をくくりつけ水の勢いを弱め堤防を守った。

③余水吐き
ため池がいっぱいになったときにここからあふれさせて、堤防がこわれるのを防ぐ。

たて樋管

底樋管（桧材のくりぬき）

土堤の長さ（下部）18m
（上部）81m
高さ　22m

池は七箇、神野、吉野村にまたがり、周囲8㎞面積81ha。
この堤の工事は9万4千立方mのべ38万人を要する大工事でこのうち空海は16万人分の工事を行ったと推定されている。

役人が修復しようとしましたが、集まる人*も少なく、工事もうまく進みませんでした。地元の農民や役人の願いで、僧と弟子をつれた空海が工事の責任者となって、821年満濃池にやってきました。

名声をしたって集まってきた農民に空海は、農業の大切さと工事のやり方をわかりやすく話しました。心をひとつにした農民たちの働きによって、わずか3ヶ月で池の堤は完成となりました。

この土木工事を通じて人々は、米づくりは国をささえるということ、その水をためる池の工事は、農民の暮らしをたもつ大切な仕事であることを、はっきりと知るようになりました。

*路眞人浜継が築池使となった。

池づくりから港の管理へ

満濃池をなおした次の年（822）空海は、奈良県の益田池の改修を弟子の真円におこなわせました。

この池もかんがい*用の池で、天長2年（825）までかかって出来上がりました。

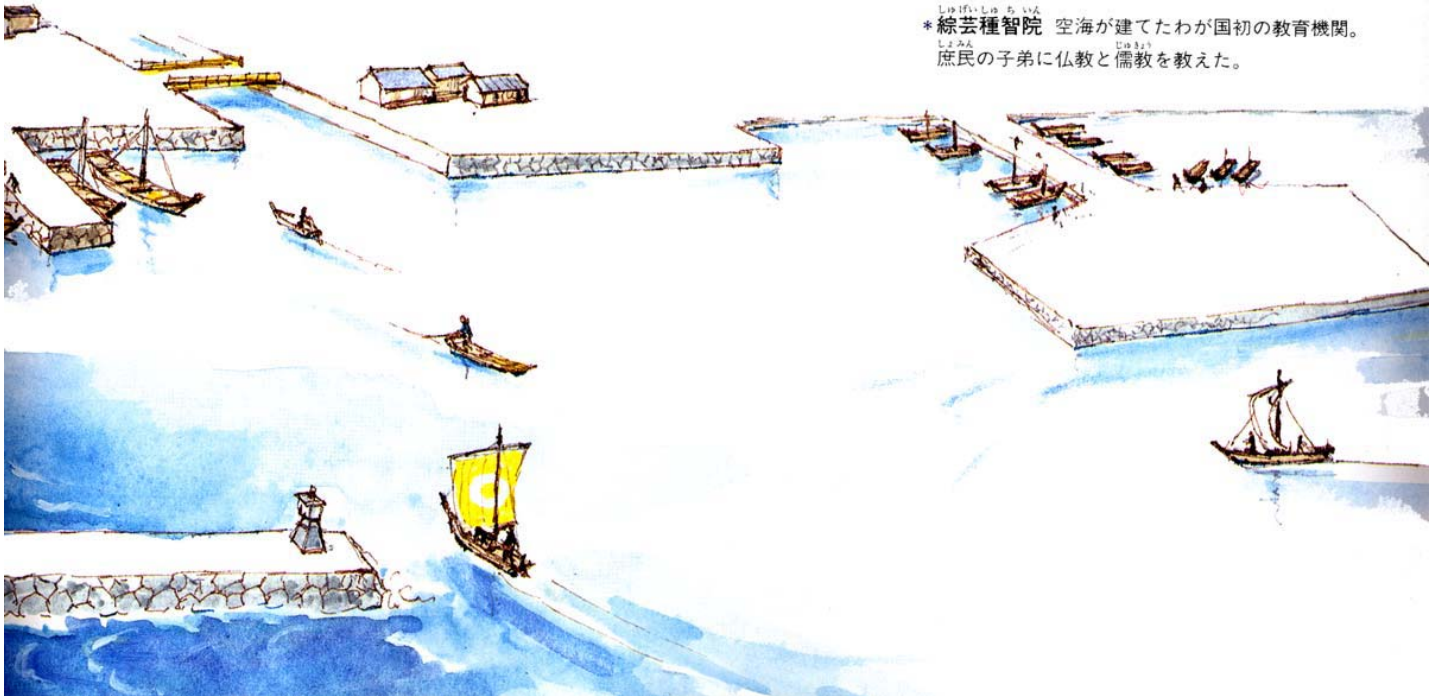
*かんがい　田畑に水をひき、土地をうるおして、農作物の生産を高めること。

また828年空海は、大輪田造*の別当（責任者）に任命されました。ここは行基がつくり、重源が修理した大事な所ですが、大阪や京都への荷物がうまく運ばれるように、港をさらによく整えました。

*大輪田港　兵庫県にあって難波津（大阪港）に船が入る前の港。はじめ行基がつくり、後に平清盛が経ヶ島を築いて波を防ぎ、さらに重源が修理した。
大輪田造は場所をさし、船所(港)を管理する。

このように、土木工事の面でもほかの人が手におえない仕事をなしとげた空海は、たくわえた知識や指導力をそそいで、高野山一帯に寺や学校*、修行所をもった仏教のまちをつくりあげました。
そして、835年に死去した空海は、その功績によって延喜21年（921）に弘法大師という称号がおくられました。

*綜芸種智院　空海が建てたわが国初の教育機関。庶民の子弟に仏教と儒教を教えた。



六字の念仏と踊り

空海なきあと、都は京都に移り、寺はますます貴族や一部の人のものとなり、あやしげな呪術やまじないがもてはやされていました。

若い頃、すすんで道をなおし、井戸や池をほり、橋をつくるなどして修行をつみ、20歳で僧となった空也は、めぐまれぬ農民たちに、生きる力と仏の慈愛をわかりやすく伝えようと「南無阿弥陀仏」*の六字をとなえるやり方でその考えをひろめていきました。感動した人々は困難や災害にひるまず、立ちむかうようになりました。

空也は、さらに東北地方まで念仏をとなえて道や橋をつくったので、人々から市聖*とよばれました。

空也年表

	出生年（903？）、場所は不明
	十代の頃から全国をめぐり道、橋、井戸を掘る
948（天暦 2）	大乗戒をさずかる
951（　　5）	京都周辺に疫病がはやり、死者多数でる
	鎮静のため、六波羅蜜寺建立
972（天禄 3）	70歳で死去

＊西方浄土にすむ阿弥陀仏の教えに従うことをあらわすとなえのことば。

しかし、武士が力で天下を制する時代、さらに人々の心は荒れていきました。そんななか、諸国をまわっていた僧 一遍は、なやみや相談に応じ、そうした人々とともに念仏をとなえながら、くずれた道や崖をなおし、人々から遊行上人*とか捨聖*とよばれ、したわれていました。

*遊行　僧が国々をめぐり説法をして歩くこと。
*市聖・捨聖　学徳すぐれた僧を聖といい、町や貧民街で活動したのをたたえた呼称。

集まった人々が、工事の完成や、楽しい時、念仏をとなえながら踊ったので、その「踊り念仏」や「鉦たたき」は農民の間に広がっていきました。

一遍年表

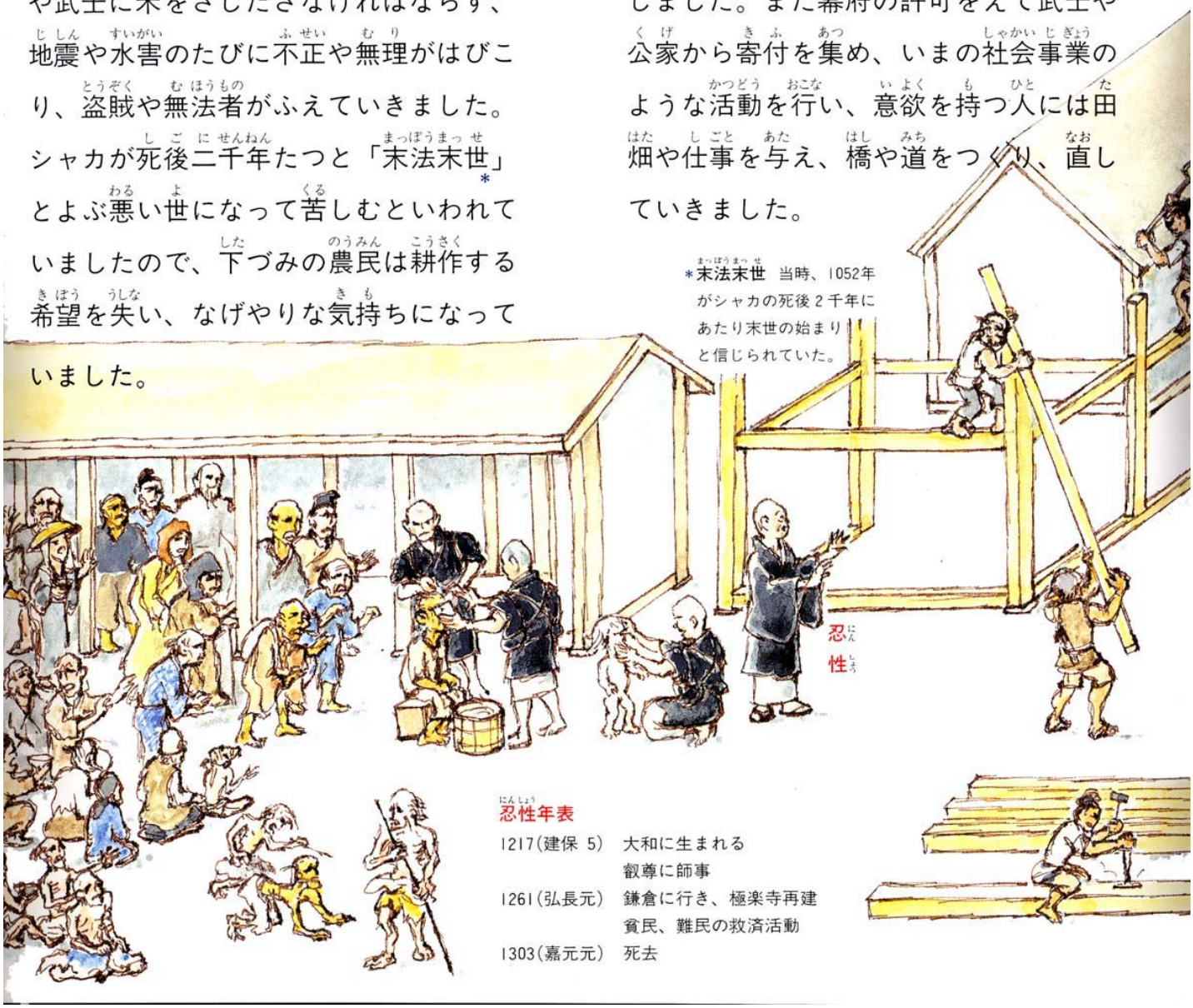
1239(延応元)	伊予国に豪族の子として出生
1271(文永 8)	信濃の善光寺に参り、その後伊予に帰って時宗を開く
1273(　　10)	34歳から旅をはじめる
1289(正応 2)	兵庫の観音堂で死去　51歳

お坊さんの社会事業

鎌倉時代、農民は病気や災害でも、領主や武士に米をさしださなければならず、地震や水害のたびに不正や無理がはびこり、盗賊や無法者がふえていきました。シャカが死後二千年たつと「末法末世」*とよぶ悪い世になって苦しむといわれていましたので、下づみの農民は耕作する希望を失い、なげやりな気持ちになっていました。

こうした様子をみかねた鎌倉極楽寺の僧忍性は、施設をつくって食べ物や家のない人を救い、気力を失った人々をはげましました。また幕府の許可をえて武士や公家から寄付を集め、いまの社会事業のような活動を行い、意欲を持つ人には田畑や仕事を与え、橋や道をつくり、直していきました。

*末法末世　当時、1052年がシャカの死後２千年にあたり末世の始まりと信じられていた。



忍性年表

1217(建保 5)	大和に生まれる 叡尊に師事
1261(弘長元)	鎌倉に行き、極楽寺再建 貧民、難民の救済活動
1303(嘉元元)	死去

奈良西大寺の僧 叡尊は、公家や武家から信頼をえていましたが、弟子の忍性がおこなっている社会事業に感激し、鎌倉で救援活動をはじめました。それは、武士やその他の人々の生活を真にささえている農民がいちばん恵まれず、苦しんでいるのは「末世」であり、そういう人たちこそ救わなければと考えたからです。

叡尊年表

1201(建仁元)	大和に生まれる 修行学習ののち西大寺で教化
1261(弘長元)	弟子忍性とともに、鎌倉で社会事業に努め、病人、貧民を救済した
1290(正応 3)	死去

さらに叡尊は、苦しむ人がいるのは、仏が僧としての自分の力をためしているのではないかと反省し、給食所や宿舎をつくってたすけました。そして不正や、むやみに生き物を殺さないようにいましめ、悪い路や難所をのぞくなど、心と生活を救うめざましい活動を行いました。

岩のトンネルをほりつづけた禅海

それからずっと時がたった江戸時代、越後（いまの新潟県）の僧 禅海は、各地をまわったあげく大分県山国川ぞいの絶壁*を通りかかりました。

そこは「くさりわたし」といって、岩壁をくさりをつたっていく危険なところで、しかも、生活のうえで、どうしても通らなければならない大事な道でした。

困っている村人のようすを見かねた49歳の禅海は、すぐに藩主の許しをえて、道をふさいでいる岩山をほりはじめたのです。

＊山国川の流れる台地は峡谷絶壁が多く、頼山陽はその景観を「耶馬渓」と名づけた。

禅海はここに所々に明かりとりの窓のある高さ３ｍ幅2.7ｍ長さ144ｍのトンネルと、約200ｍの岩場の道をつくった。

＊**托鉢**　僧がお経をとなえながら人家をまわり、米やお金をうけること。

昼は村を托鉢*して米や銭の寄付をつのり、夜はひとり固い岩にノミを振るう禅海の姿に動かされ、やがて村人が手伝うようになりました。

そうした村人と、やとった石工*の協力で、30年の後、青の洞門*とよばれるトンネルがみごとにできあがりました。

さらに禅海は、トンネルの入口に小屋をつくり、通る人から銭をもらい、それでトンネルを広げ、通りやすくしました。

*石工　長洲の石工・岸野平右衛門たち。
*青の洞門　「青」は小字の地名。禅海は菊池寛の小説「恩讐の彼方に」のモデルになった。

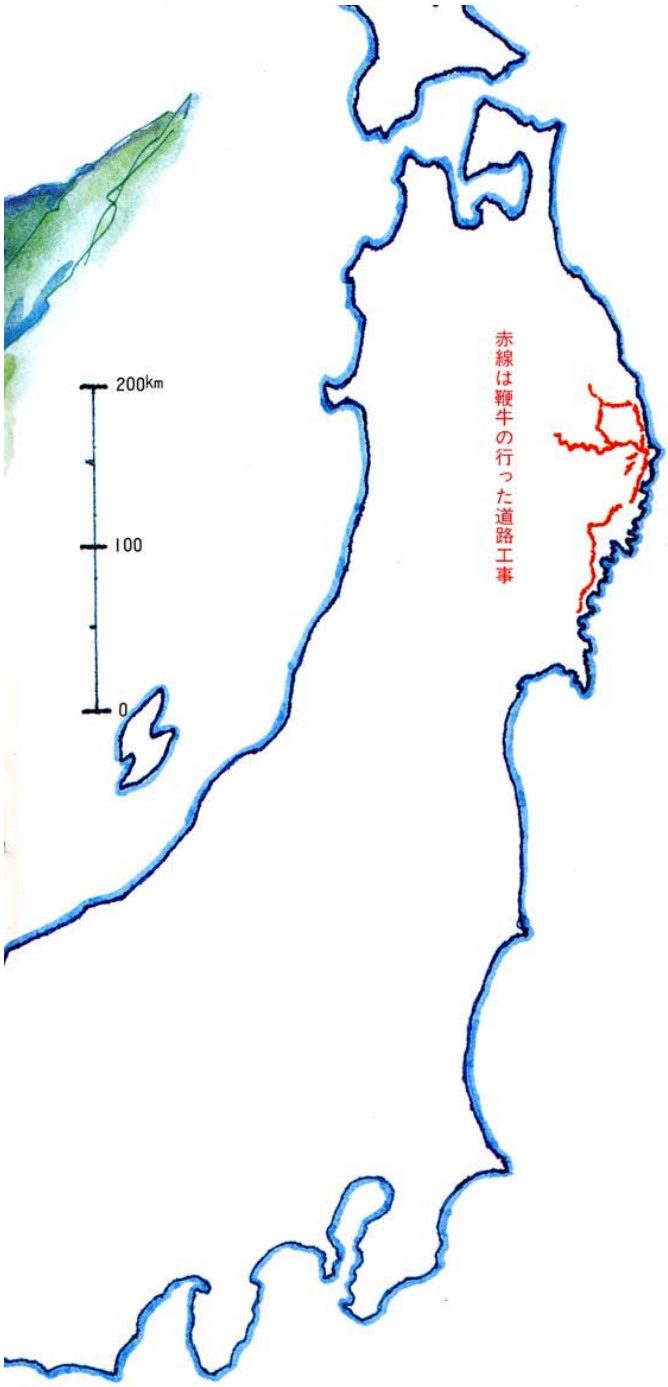
禅海年表

1687(貞享 4)	越後の福原氏に生まれる 江戸で、行者として遍歴
1724(享保 9)	湯布院興禅寺で托鉢 岩山掘削
1750(寛延 3)	完成（30年間）
1767(明和 4)	真如庵に住む
1774(安永 3)	88歳で死去

百里におよぶ鞭牛の道づくり

江戸時代の中ごろ、岩手県の東、三陸沿岸地方は冷害で作物がとれず、たびたびの大凶作で飢え死する人がでるありさまでした。よそから食料をはこぶにも、けわしい道が多く村人は困っていました。

地元に生まれ育った42歳の僧 鞭牛は、道づくりに残りの人生をささげる決心をして、みずからつるはしを握って道路をひらき、橋をかけていきました。



危険な所ではぎせいになった人をとむらい、かたい岩にぶつかるとたき火をして水をかけ、亀裂をつくってくだいたりして、鞭牛の行った道路工事の場所は108ヶ所、協力した人足はのべ6万9千人におよびました。こうして30年間、南部藩内百里（約393km）におよぶ道づくりをした鞭牛は座禅をしながら73歳で亡くなったといいます。

鞭牛年表

1710(宝永 7)	和井内村に生まれる
1731(享保16)	母死、釜石常楽寺に出家
1742(寛保 2)	東長寺和尚となる
1750(寛延 3)	小枝街道普請
1751(宝暦元)	生涯道づくりを決意、42歳
1755～57	大凶作
1758(宝暦 8)	閉伊街道などをひらく*
1759(9)	川目、川井、花原の橋、道工事
1760(10)	船越山道をひらく
1765(明和 2)	浜街道をひらく
1767(4)	宮古七戻り道をひらく
1769(6)	宮古－岩泉間の道路開削
1774(安永3～5)	三陸津波、洪水、凶作
1777(6)	橋野－鵜住居間の道路開削
1778(7)	小槌川架橋　大槌－鵜住居間をひらく 凶作霖雨大風雨洪水
1781(天明元)	吉里吉里－大槌間の道をなおす
1782(2)	73歳で死去

＊**閉伊街道**　盛岡と宮古をむすぶ危険でしかし大事な道路。現在の国道106号。

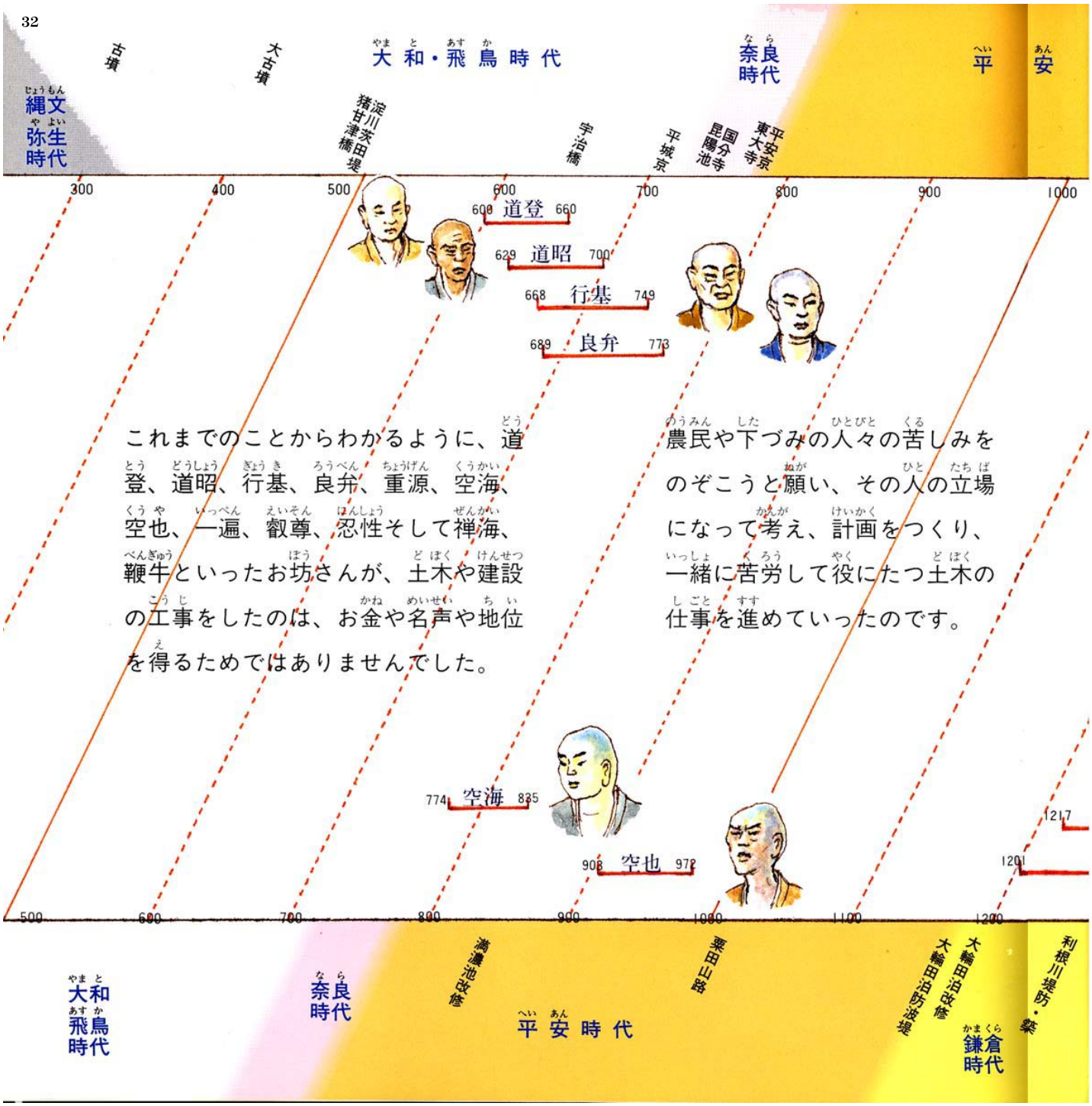
農民のための社会事業と土木の仕事

空海から鞭牛にいたるお坊さんたちは、時代も地域も違い、考え方ややり方もいろいろでしたが、共通しているのは、農民に役立つ福祉や社会事業をおこない、その人たちのために土木の仕事をおこなったということです。

この時代、農業による作物づくり、とりわけ米はすべての生活の基本となっていました。ですから国の富も領主の力も武士の給与も、みな米の多さできめられていました。

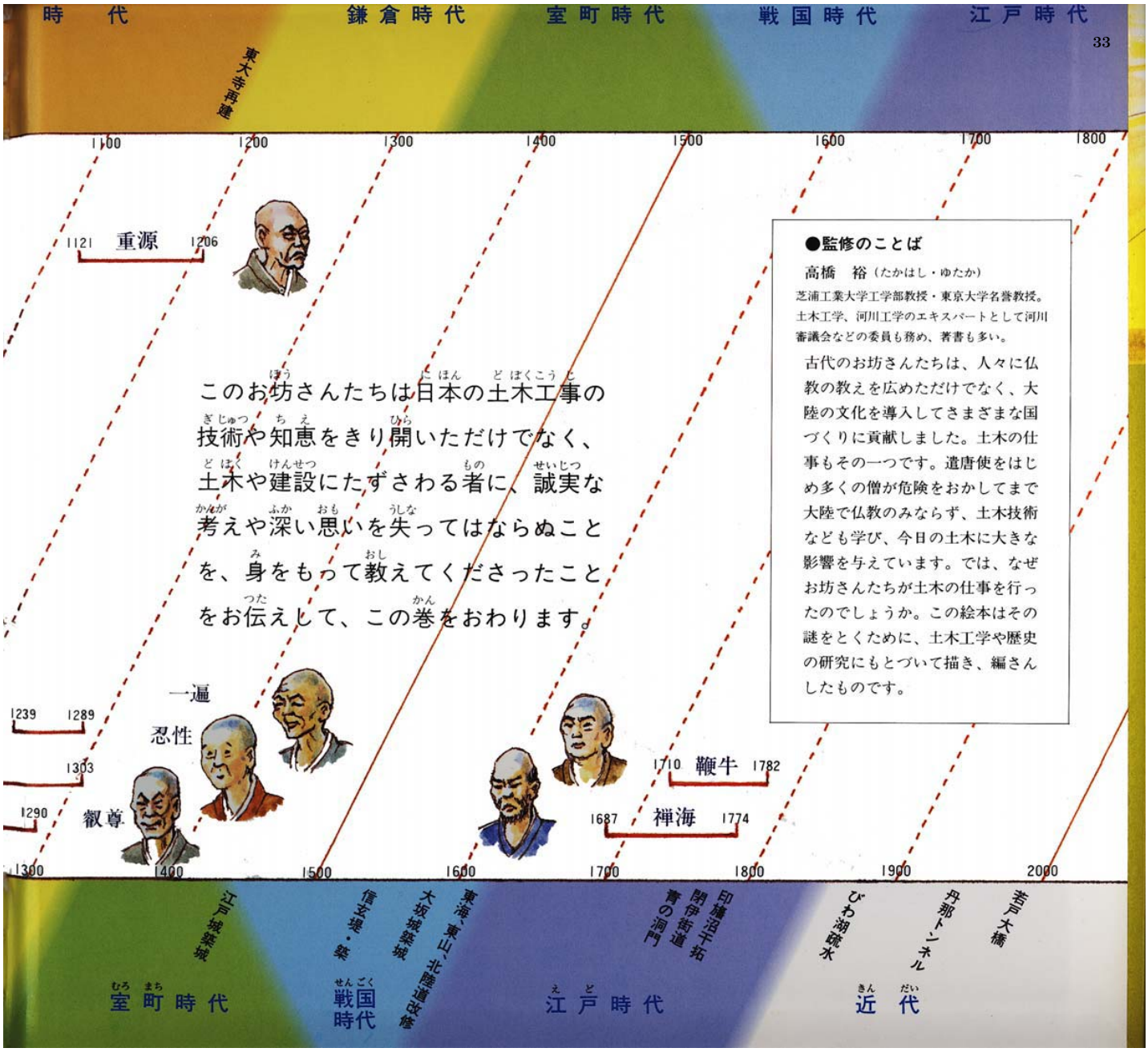
その米をつくる農民が貧しく、苦しんでいるのは政治が悪いためで、国がおとろえるはじまりとなる、その農民の身近なことをたすけようと、力をかたむけたお坊さんたちでした。

したがって、それはただ単に井戸を掘り、食べ物などを与えたのではなく、国のなかで最も大事な人を救っていたということです。道をつくり橋や池をなおしたのは、それによって農民が安心して農耕に力をそそげるようにして、ひいては国中の人々の生活をささえ、国をまもり、国をささえたということなのです。



これまでのことからわかるように、道登、道昭、行基、良弁、重源、空海、空也、一遍、叡尊、忍性そして禅海、鞭牛といったお坊さんが、土木や建設の工事をしたのは、お金や名声や地位を得るためではありませんでした。

農民や下づみの人々の苦しみをのぞこうと願い、その人の立場になって考え、計画をつくり、一緒に苦労して役にたつ土木の仕事を進めていったのです。



このお坊さんたちは日本の土木工事の技術や知恵をきり開いただけでなく、土木や建設にたずさわる者に、誠実な考えや深い思いを失ってはならぬことを、身をもって教えてくださったことをお伝えして、この巻をおわります。

●監修のことば

高橋　裕（たかはし・ゆたか）

芝浦工業大学工学部教授・東京大学名誉教授。土木工学、河川工学のエキスパートとして河川審議会などの委員も務め、著書も多い。

古代のお坊さんたちは、人々に仏教の教えを広めただけでなく、大陸の文化を導入してさまざまな国づくりに貢献しました。土木の仕事もその一つです。遣唐使をはじめ多くの僧が危険をおかしてまで大陸で仏教のみならず、土木技術なども学び、今日の土木に大きな影響を与えています。では、なぜお坊さんたちが土木の仕事を行ったのでしょうか。この絵本はその謎をとくために、土木工学や歴史の研究にもとづいて描き、編さんしたものです。

土木の絵本シリーズ

小学上級から大人まで

ISBN4-916173-08-2 C0751

〈土木の絵本シリーズ〉について

この「土木の絵本シリーズ」全4巻は、土木の分野ですぐれた仕事をした人物を描き、自然や時代とかかわった歴史をたどることで、土木建設の役割を知り、大切さを理解していただくために企画しました。特に地球環境へのこまやかな対応が求められているいまこそ、人と自然が共存共栄していた長い歴史から学び、さらに自然をよく理解することがまず基本だと考えます。そのうえで科学や技術を進めるにあたって、この絵本シリーズが、これからの人々と社会のお役にたてば幸いです。

著者

加古里子（かこ・さとし）

絵本作家。工学博士、技術士。「かわ」「海」「地下鉄のできるまで」「ダムをつくったお父さんたち」「ピラミッド」など著書多数。

緒方英樹（おがたひでき）

㈶全国建設研修センター勤務。「国づくりと研修」編集人。

ISBN4-916173-08-2

人をたすけ国をつくったお坊さんたち

1997年10月20日第1刷発行

2002年6月10日第3刷発行　　発行／㈶全国建設研修センター

（お問い合わせ先）〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館7F TEL ㊐ 3581-2464